

2012年9月17日
0:21

アンリアルキヤット

同心円

二つの意味で、僕はまだ現状をポジティブに考えることができた。

一つは、僕の記憶が失われていることだ。僕が人間だったことや、人間だった時に持っていた知識を知ってはいるが、僕がどんな人間だったかは少しも思い出せない。なんという名前で、どんな見た目で、どんな性格で、どんな目標を持って、どんな生き方をしていたのかわからない。そもそも、僕の一人称は僕だったのだろうか。年齢も性別もまったく思いつかない。

二つ目は、今の僕が猫だったことだ。もちろん人

間だった頃の性格がわからない故に、特に嫌悪するような動物はいないのだが、植物や無生物になっていた可能性もゼロでなかったであろうと思われる。そう考えれば猫でよかったと心底思える。

なぜか知っている書物、フランツ・カフカの『変身』の主人公ザムザは虫になったのだ。しかも家族もいる自宅の自分の部屋で、記憶も残ったままで。そんな不幸に比べたら、僕のケースはまだまだいい方だ。

原因はわからないが、僕は猫だ。猫になった。おそらくは。

僕は今、木の上にいる。傾いた太陽が今にも地平線に消えようとしているのがよく見える。どこにある何の木かは知らないが、気づけば僕はここにいた。自分で登ったのだろうか。それなりの高さだからそうだろうと思う。高所恐怖症の猫なんて子猫くらいのものだ。あるいは僕は猫だった記憶もなくしているのかも知れない。果たして、僕はいつから猫だったのだろうか。

声を出そうと試みて、猫の鳴き声が出た。ほう、これが猫の鳴き声か。知識として、猫はニャーニャー鳴くものだと思っていたけれど、実際は全然違う音だということがわかる。もしくは人間と猫とでは音の聞こえ方が違うのかも知れない。耳の位置も大きさも異なるのだからあり得ることだ。可能性の話だ。

すんすんと鼻を鳴らし、僕は猫である僕を僕にインプット。猫の体に刻まれている本能が、その作業を手伝ってくれた。耳を立てて伏せて、尻尾を振っ

て止めて、爪を出して仕舞って。最後に目をキョロキョロ、ヒゲをビクビクさせてインプット終了。

猫の目で見ると僕は、全身が真っ黒な毛で覆われている。僕は黒猫らしい。特に猫の種類に詳しいわけではないけれど、野良なのだからおそらくミックスだろう。きっと自分がどうい種類のかを自覚している猫は、世界で僕だけに違いない。

さて、日没だ。当然、僕は起き上がって活動する時間である。僕は猫であり、猫は夜行性、ゆえに僕は夜行性なのだ。

ひょい、と木から足を離し、すた、と着地する。もちろんほとんど無音。流石猫である。

猫になったせいとか、僕は空腹に敏感になったようだ。食欲が湧いてきた。本能は僕にハンティングをさせようとする。

とはいえ、あたりに小動物の気配はない。ここはどうやら住宅街にある公園のような場所らしく、少

しだけ自然が残っているが、僕の腹を満たしてくれ
 そうなものはなさそうだ。僕は舌打ちの代わりに耳
 を伏せた。

しかしよく考えてみれば、猫の食べ物は小動物だ
 けでもないだろう。近場にゴミ置き場でもあれば漁
 ることができる。僕は公園から出てアスファルトの
 道を旅することにした。猫になったばかりで定住地
 なんてない。ふらふら浮浪にさ迷うべし。

まあ、世の中人間にも猫にも甘くはないので、ゴ
 ミ置き場に先客がいたりする。僕と同じ黒を身に纏
 った鳥、カラスが数羽で生ゴミをつついていて。人
 間から見ればきつとただの鳥だろうけれど、猫であ
 る僕からすれば、あの大きなくちばしは凶器だ。多
 勢に無勢、横取りしに行つて襲われたらかなわない。
 僕はよけて先へ進むことにした。

広い道は気持ち悪い。落ち着かないのだ。見るの
 は得意だけど、見られるのは気に食わない。曲がり

なりにも捕食者、ということだろうか。

と、脇道と呼ぶには狭すぎる、堀と堀との隙間み
 たいな道が僕を誘っていた。本能的に体を滑り込
 ませる。雑草が茂り、石が転がっているが、ネズミは
 いらない。空腹のまま、再び四つ足を駆動させる。進
 め、捜せ、追え、喰らえ。僕の本能は僕を休ませな
 い。

食べることは生きることであり、同時に殺すこと
 である。自分を生かすためには、常に他者を狩り続
 けなければならぬ。それは誰にでも言えることだ。
 猫である僕にはその真理が真っ直ぐに理解できる。

弱肉強食とはよく言うけれど、僕は別に人間を強
 者とは思っていない。だって僕は知っている。人間
 は自己の外面を大切に、社会でのステータスを大
 事にし、しかしその二つがボロボロになった時、自
 らの命を捨てるようなことをする。

生きているのなら、自分を生かす為に殺した他者
 の分も、精一杯生きるのが道理ってものだろう。

とはいえ、猫が道理を説いたところで、人間が聞く耳を持つわけがない。そもそも、猫の鳴き声では人間に言葉を伝えることもできないのだ。

言葉がわかって喋れない。かの有名な「名前のない猫」も同じようなことを考えていたように思う。

さて、しばらく歩くとまた広い道に出た。僕はとりあえずキョロキョロする。と、動くものを見つけて自然とそちらに目が行く。

それは人間だった。周囲にアルコールのきつい香りが漂っている。猫には近づけないレベルだ。しかしそのきつい香りに混じっているいい匂いを、僕の鼻は嗅ぎ取った。

人間は覚束ない足取りで右に左に揺れながら、狭い歩道を危なげに歩いている。今にも車道に飛び出しそうで見ていられない。

見ていられないと言いつつ、僕の目はその人間のフラフラと歩く様をじっと見ていた。

何を隠そう、先ほど嗅ぎ取ったいい匂いの正体を確かめようと思ったのだ。ほぼ間違いなく食料である。猫の鼻でいい匂いと感じるなら猫が食すものに決まっている。

ただまあ、例の人間はアルコールの海を泳いできたかのような異臭がしているので、迂闊に近寄ると気絶しそうなのだ。僕は一定の距離を保ったまま、目の前のフラフラ歩きと同じ速度で追いかけることにした。

時には立ち止まり、時にはつまづきそうになり、アルコール臭の人間は歩き続ける。だが猫が普通に歩くよりも遅いこの歩みでは、無事に目的地に到着するかどうかも怪しいものである。

人間を追いつつ周囲にも気を配る。より簡単に食料にありつけるなら当然そちらの方が良いからだ。しかし全くと言っていいほど何もない。空腹も限界に近い。いよいよ人間からかさうしかなさそうだ。

ぽつ、ぽつ、と雨が降り始め、あつという間にしとしと長雨の兆しを見せる。僕の小さな体が濡れる、冷える。僕の前行く人間も、なす術もなく雨に打たれている。

と、何を思ったのか人間が立ち止まった。提げていた鞆を漁って何かを取り出し、それを掲げてまた歩き出す。濡れるのにも構わずふらふらと。

傘を差しているつもりなのだろうか。しかし猫である僕の目では、彼の手に握られているものが何なのか見分けられない。どうやら棒状の物であるらしい事はわかるのだが。どうも猫の目は一長一短があるようだ。

そのまましばらく歩き、僕もアルコール臭の人間もすっかり濡れてしまった。猫が濡れ鼠である。少し面白かったので、笑うつもりでヒゲをピクリと動かし、再び前方に意識を戻す。人間は漸く目的地に到着したと見えて、とある家の前で何かを待っている。

る。やがて別の人間が、その家から出てきた。

どうやらその家の娘らしいその人間は、濡れている方の人間を見て慌てて彼を家の中に入れ、そして、その様子を注視していた僕と目が合った。

瞬間、僕は逃げ出した。雨の中を全速力で駆ける。

人間は僕が逃げる様子を見て興味を失ったようで、追いかけてはこなかった。人間は怖くない。怖くはないが本能的に逃げてしまう。やはり見られるのが嫌いなのか。僕は僕に問う。仕方ない、奪いそこなった食料は諦めるとしよう。

雨に濡れ、走り疲れて足が止まる。辿り着いたのは何らかの店の前だった。閉じたシャッターが、今が夜半であることを表している。空腹を表す小さな音が雨音に消される。店のすぐ脇に狭い道があって、やはり僕は本能で入り込んだ。

店の屋根がこの道も覆っているので、雨は入り込んでこない。すっかりびしょ濡れで体も冷えてしま

った僕には今更だったが、それでもほんの少しだけ安心した。

上を見上げると、空っぽのツバメの巣がある。この店の主が残しているのか除去していないだけなのかは知らないが、それと関係なく小鳥が食べたくなかった。ツバメは一体どんな味がするのだろう。想像するだけで空腹の感覚がひどくなる。自滅だ。どこかの国では巣も食べられているのだったか。

一声鳴いてみる。猫の声。

僕はどうして猫なのだろう。そして、人間だったのだろう。急に人間が猫になるとは考えられない。でも僕の記憶はそれを示している。

輪廻転生、という言葉がある。全ての生物は死ぬと新しい生命に生まれ変わる、そのためにあの世で魂を洗われるという話。僕のこの奇妙な記憶は、前世の記憶の残骸なのかもしれない。僕は生まれ変わるときに魂を洗われ損なったのかも知れない。猫の哲学。こんなことを考えてしまうのは体が弱っているからだ。きっと。

ふと目を覚ますと朝になっていた。狭い道にも陽光が差し込んでいる。地面の湯き具合から、日が昇ってしばらくたっていることを知る。雨は日の出の前に止んだようだ。

僕の目の前の広い道が光で溢れている。空へと昇る道。

僕は大きく体を伸ばして身を起こし、欠伸を一つ。こうやって自分がまだ生きていることを実感する。

昨日を生き延びた。今日も生き延びる。明日へと続く道。

記憶なんか関係ない。僕は今猫なのだ。それだけ分かっている。だから僕は身を翻し、本能のまま後ろの狭い道を進んでいく。明日へと進んでいく。